

海外派遣研究助成事業による研究の成果

研究者氏名	北台 留衣
所属機関	国立がん研究センター中央病院 腫瘍内科
<ul style="list-style-type: none"> ・研究に従事した外国の研究機関名 ・参加した国際学会・会議名 	The 25th Annual Congress of the European Society of Gynaecological Oncology (第25回欧州婦人科腫瘍学会)
渡航期間	自 2024/3/7 至 2024/3/10
<ul style="list-style-type: none"> ・研究内容 ・国際学会・会議内容 	子宮・卵巣がん肉腫におけるメソテリンの発現の検討
研究成果 (要約: 800字)	
<p>私は、2024年3月7日から10日までバルセロナで開催された Annual Congress of the European Society of Gynaecological Oncology に参加し、ポスター発表を行いました。本研究の内容は、子宮・卵巣がん肉腫におけるメソテリン (MSLN) の発現およびその予後を明らかにしたものです。希少癌である子宮・卵巣がん肉腫は極めて予後不良の疾患であるにも関わらず、未だ標準治療が確立されていません。一方で、他がん種で MSLN を標的とした治療の良好な成績が報告されています。そこで、子宮・卵巣がん肉腫における MSLN の発現およびその予後を明らかにすることで、これらのがん種に対しても、MSLN 標的治療が応用できる可能性を探索しました。さらに、子宮がん肉腫に対する有望な治療戦略の一つである HER2 発現との相関についても検討しました。結果としては、子宮がん肉腫 119 例と卵巣がん肉腫 9 例において、全例で MSLN の発現を認め、それぞれ 33.9%、66.8% で MSLN の高発現を示しました。子宮がん肉腫においては、臨床病理学的特徴は MSLN 発現と相関しませんが、MSLN 高発現群は低発現群と比較して全生存期間の延長を認めました (HR=0.48, 95%CI=0.26-0.89, p=0.016)。また、HER2 高発現患者は HER2 陰性患者より MSLN 発現が高かったが、MSLN の高発現群と低発現群のいずれにおいても、HER2 発現は全生存期間に影響を及ぼしませんでした。これらの結果から、MSLN 高発現が子宮がん肉腫の良好な予後因子である可能性が示唆され、MSLN の標的治療が、子宮がん肉腫でも有効である可能性を報告しました。</p> <p>学会の参加を通して、世界のエキスパートの講演を聴講し、議論を行うことで、自身の研究視野を広げる大変貴重な機会となりました。婦人科がん領域の薬剤開発はすすんでいますが、希少癌はその特性から薬剤開発から取り残されることが多く、本学会参加で得た経験を今後の研究に活かし、がん研究や薬事開発を進める一助になれるよう精進してまいりたいと思います。ありがとうございました。</p>	